

立命館大学大学院 言語教育情報研究科

言語学・コミュニケーション表現学コース を詳しく紹介します！

「言語学領域の研究について詳しく教えてください」

言語教育情報研究科の言語学・コミュニケーション表現学コースは、そのコース名だけではなかなかコースでの研究内容についてイメージすることが難しいという方もおられます。

今回はまず、言語学・コミュニケーション表現学コースの前身となる言語情報コミュニケーションコースで言語学領域の研究をおこない、修了された方に、実際の研究内容やコースの特徴、研究科修了後のキャリアへの影響などについてお話をお伺いしました。このコースでは、特に言語学領域では「プログラミング」についても指導を受けることができ、それが自身の研究にどのように活かされるのかということについても詳しく語っていただいています。

また、コミュニケーション表現学領域についても、より詳しい説明を最後に掲載していますので是非それもあわせてご覧ください。

お話を伺った方 佐藤 寿さん(2024年3月修了)
仕事：日本語教師 ※修了後は中国(青島)にて勤務
入試方式：社会人(自己推薦)入学試験
研究テーマ：コロケーション「名詞+を+動詞」における活用形の偏りに関する研究



Q1_言語教育情報研究科では、どのような研究をしましたか？

私の修士論文のテーマは、「コロケーション「名詞+を+動詞」における活用形の偏りに関する研究」です。

私は日本語を教えていますので、日本語を学ぶ学習者にとって有益になる研究をしたいと考えました。そこで、コロケーション(語と語の慣習的な結び付き)に注目しました。母語話者は、無意識的に自然なコロケーションを作り出すことができますので、コロケーションを構成する個々の語形に着目することは稀です。そのため、語形に着目した研究はあまりされていませんでした。「コロケーション「名詞+を+動詞」における活用形の偏り」を巨大な電子テキストから網羅的に抽出し、その結果を反映させた辞書作成も念頭に置いて研究をしました。

Q2_佐藤さんの目から見て、言語教育情報研究科の特徴は何ですか？

言語教育情報研究科の特徴として、特筆しなければならないことが2つあります。

1つは、言語教育情報研究科はいわゆる文系に属しますが、プログラミングの授業があることです。プログラミングというと、理系の学生が勉強する科目と思われがちですが、文系においても、研究データの統計値を算出する際などにも必要になってきます。統計値は、既存のアプリケーションを利用すれば、その機能内においては算出することができます。しかし、それでは研究はアプリケーションに依存することになってしまいます。言語教育情報研究科では、研究に必要なテキスト処理を行うにあたり、臨機応変にスクリプトが書けるようにプログラミングの指導をしていただけます。プログラミングの授業は初学者でも理解できるように丁寧に説明されますので問題ありませんでした。

もう1つは、コーパスです。コーパスによる言語研究は、Web アプリケーションを利用した研究が主流になっていますが、言語教育情報研究科はそうではありません。やはり先ほど取り上げたプログラミングと同様に、コーパスとは何か、という根本の理解からはじまり、最終的にそれを使いこなして言語研究ができるようになるま

で指導していただけます。言い換えれば、Web アプリケーションのコーパスは、備え付けられたボタンをクリックすると、何らかの文字列が返ってくるわけですが、ボタンをクリックしただけで、コーパス内でどのような処理が行われているか理解もせず、また、与えられた文字列を疑いもせずにその結果を研究に利用すること（コーパスのブラックボックス的利用）がないように、指導していただけます。

以上の2つは、他の大学院では学ぶことがないであろう言語教育情報研究科の特徴と言えると思います。

Q3_佐藤さんは中部圏に住んでおられたと聞いています。言語教育情報研究科は、オンラインだけでは修了することはできませんが、どのように対応しましたか？

はい。私は大学院時代、愛知県に住んでいたのですが、そこから大学院に通いました。私の研究に必要な知識が得られる授業を調べてみると、多くはオンラインで開講される授業でした。もちろん、それらだけでは修了認定に必要な単位を取得することはできませんので、対面で開講される授業を受講しに京都まで通いました。

大学院1年目は、時間割の都合によっては、京都で1泊することもありましたが、2年目は基本的に日帰りでした。そのため、大学に行っても時間に余裕がありませんので、図書館でゆっくり文献を探したり、読んだりすることができませんでした。そこで、事前に大学の図書館のHPでどこに文献が置いてあるか、もしくはないかを調べておき、時間をかけずに文献を見つけ、それを借り、帰宅途中に読むということを繰り返していました。また、夏休みなどの長期休暇の際は、1週間ほど京都に滞在し、その期間に研究に必要な文献をコピーするなどして集中的に資料を集めたりもしました。

そして、これは教員の教育・指導の考え方にもよりますが、私の指導教員は、「質問、疑問がある時は、いつでも連絡してくるように」という方でした。私は、研究で問題や疑問があると、遠慮なく教員に連絡を取りました。早朝や深夜に対応して頂いたこともあります。教員は、言語だけでなくITの知識にも造詣が深いので、お忙しいにも関わらず、すぐに時間を確保してくださり、オンラインで面談をしてくださりました。もし、このようでなければ、私は修了するのが難しかったと思います。指導教員には、今も感謝しております。そして、今後は、私も日本語を教えている者として、指導教員の指導者としての態度を見習いたいと思っています。

Q4_言語教育情報研究科での研究(または授業で得た知識)は、その後のキャリアにどのような影響がありましたか？

日本語を教えていると、学習者から、類義語の違いを質問されることがよくあるのですが、私は、言語教育情報研究科で学んだ知識を活かし、自作コーパスから例文を収集しています。授業中に、学習者の前で、その収集過程を見せると、多くの学習者が興味を持ち、授業後にそのやり方を学びたいと聞きにくるほどです。

Q2の「言語教育情報研究科の特徴」のところで述べた内容を学べる大学院は、私が知る限りではほとんどありません。言語教育情報研究科に所属する皆様には、ぜひ、プログラミングとコーパスの授業を受講し、自分の研究や将来のキャリアに活かしていただきたいと思います。

コミュニケーション表現学領域の紹介

言語教育情報研究科の言語学・コミュニケーション表現学コースは、前身となる言語情報コミュニケーションコースのコミュニケーション関連の領域を更に拡大し、2024年度より新たに開設したコースです。コース名にもある「コミュニケーション表現学」領域とはいったいどのような領域なのか、解説します。

◆コミュニケーション表現学領域について

私たちのコミュニケーションは、想像している以上にさまざまな資源を巧妙に積み重ねて成り立っています。たとえば、言葉を用いる人々による認知の仕方、メディアによる表現形式の多様性、視線の動きやジェスチャーのような身体動作などです。「コミュニケーション表現学」では、コミュニケーションを、個々人が抱えている思いや考えを音声や身振り、文章、メディアなどの表現手段を用いて他の人々と共有していく活動だと捉えています。

たとえば、会話分析を用いてさまざまな相互行為を探究します。日常や制度的場面を対象に、言葉や身体が特定の環境下でどう運用されているかを観察することで、人間に対する理解を深めるだけでなく現代社会の諸問題の解決にも役立つ知見を得られます。また、言語表現に潜在する詳細な認知プロセスに着目する認知言語学の観点と、相互行為が生じる場としてのコンテキストの働きを解明する語用論の観点とを効果的に組み合わせることで、言葉とコミュニケーションについてのより深い理解が可能になります。

さらに、上記のようなコミュニケーションが小説やマンガやアニメーションなどのフィクションの表現としてどのように動くのか、また表現をどう動かさうのかを、新しいメディア環境における文章や音声の表現実践も視野に入れながら解説します。

こうした多様なコミュニケーション表現の探究を通して、「コミュニケーション表現学」では、学問の場と社会の場を自由に往来できるようになる人材の育成を目指しています。